

Title	Shmakov, I. N: Obzor rabot i bibliographiches kii ukazatel literatury o Russkikh Lopariakh (Izvestiya Gosud, Geographicleskogo Obstchestva, 1930, Tom 62, No. 4, pp. 397-412)
Sub Title	
Author	小島, 武男(Kojima, Takeo)
Publisher	三田史学会
Publication year	1933
Jtitle	史学 Vol.11, No.4 (1933. 2) ,p.181(687)- 182(688)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19330200-0181

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

時代の決して闇黒時代に非ず、却つて諸人文の發達を見たることを指摘せるが如き、著者の史眼の非凡さを示して居る。著者は、古文序に述べた様にマードックの如き從來の外人作家の膨大な日本史よりも直接日本人の著した著書史料について本書を編して居る。此點に本書の後世に傳はるべき價値が存すると云へやう。然しながらもし評者をして忌憚なく云はしむれば、此點にまた本書の弱點も存すると云へる。即ち著者の利用した本邦人の著書そのものに存した誤りがその儘本書の中に取入れられた嫌ひなきに非ざることである。たとへば一二頁に支那史書に現はれた日本を述べ「The first authentic reference to Japan is probably a passage in the *Shanhai King* which states that the north and south *Wa* were subject to the Kingdom of Yen.」と述べて居るのは、松下見林の異稱日本傳以來の誤つた訓點に誘導せられた讀方で、今日、此山海經の一文は「蓋國在鉅燕南倭北、倭屬燕」と讀んで居り、南倭北倭屬燕と云ふ讀方は全然間違ひと認められて居る。更に十八頁に後漢書を魏志よりも古い史書の様に解せられてゐるのも誤りであり、十九頁に、倭人が鯨を身體に文身して居ると云ふ文も、魏志には存しない。また五十三頁に日本の祖先崇拜が全く支那輸入に過ぎずと断じ、古代日本人の神は自然神なりと云ひ、上代日本に於ける生殖器崇拜の重要性を說きたる如き、たまへ、生殖器崇拜に關する邦人の英文論文などが著者に知られたるが故に生れた記事と考へられ、著者が、最近の日本民俗學關係の邦文論文に今少し通曉せられてゐたならば、かくの如き

書評

見解には到達せられなかつたと殘念に感ぜられる。祖先崇拜の定義に就て著者と見解を異にするやもはかられないが、自分は、古代日本人の強烈なる祖先崇拜の意識が氏族制度を結成せしめたるものと信じ、その祖先崇拜をもつて支那輸入とは考へない。支那と日本とは氏族制度が根底より相違して居るし、支那文化の大量的日本移入は、日本氏族制の完成以後である。トーテミズムの痕跡ある日本祖先崇拜のより原始的な體制に就ても西田博士などの研究を見ていたゞきたい。然し要するにかくの如き諸意見の相違も著者の準據せられた日本の参考書其物の性質より生じた差違と考へられ、著者が將來更に一層正確最新なる邦人の諸研究を参照せられて、本書をより完全な文化史に大成せられんことを衷心より希望する。上述した箇所は上古史に關する部分であり、人により異論の多い所である。その他の時代に關しては評者は全く門外漢であり、却てサンソム氏の教示により啓發せられる所頗る多大であつた。終りにのぞんで近來稀なる此好著を提供せられた著者の努力に謹んで謝意を表し、その倍舊の健康を祈つて筆を置く。

(松本信廣)

Shmakov, I. N: Obrzor rabet i bibliographies
kii ukazatel literatury o Russkikh Lopariakh.
(*Izvestia Gosud. Geographicheskogo Obsto-*
hestva, 1930, Tom 62, No. 4, pp. 397—412.)

ショマコフ・イ・ニ「ロシヤ・ラツプ族に關する研究及び文獻一覽」(ロシヤ地理學協會報告書第六二卷第四號)。

著者は、本論文の内容を、「ロシヤラツプ族研究」と「ロシヤ・ラツプ族に關する文獻」の二部に分けて居る。

本論文は、著者もその序文に於て斷つて居るやうに、ロシヤ・アルハンダ尔斯ク、ムルマジスク、カレリスク地方の郷土的研究報告書乃至は、これに並行してロシヤ地理學協會のカレロリムルマン部の委員會の報告書等によつて、今日までに同地方及び同族の部分的研究は非常に進められて居るので、今こゝでは、同族そのものより、その研究を歴史的に纏め、又自分の能ふ範囲で同族に關する重要な文獻を蒐集することをもつて主眼としたのであると述べて居る。

事實、著者の序言の如く、本文は同族の研究を時代別に記し、且評して居る。次にその内の主なるところを抄譯してみると

「ラツプ族について研究されたものは、十七世紀からであつて、それ以前に同族についてまとまつた研究は出來て居らん。同族について、最も古い参考文書としては、十一、二世紀に於ける「ヤロスラフ・法令」十三世紀には、「一二五二年にロシヤより諾威に大使を派して居るが、それに附屬した公文書にラツプ族のことが記してあり、その後はノヴゴロド市役所の公文書に断片的に同族についての記事を見ることが出来る。

十六世紀の初期、ロシヤ・ラツプランドがモスクワ政府の治下にをがれるやうになつてからは、屢々同族に關した調査書などを見るやうになり、殊にイワン三世大侯の如きは法令を出して同族の調査を命じて居り、その調査の中には、同族を「森林

のラツプ族」「粗野なるラツプ族」等の項目を立て、同族を分類して居る。

十六世紀の中葉には二ヶ所に寺院が建てられて居り、これよりは資料が非常に豊富になつて居る譯である。

以上の如くに、同族の文獻の現はれなかつた時代を説明し、次に十七世紀より現今までの文獻時代を説明して居る。

その同族を研究した文獻の最初のものは、一六七三年に公にされたシェツフェルの(Scheffer, I.)一著であるとなし、それより年代順に、あらゆる方面的同族研究學徒を記し、且その研究の結果を批判して居り、一九三〇年にチャルノルスキイ(Charnolusky, V.V.)がロシヤ地理學協會から刊行して居る「ラツプ族に關した材料」(Materialy po obyti Loparej)及びホッパン(Goppin, S.P.)がロシヤ學士院より刊行した「ペチングスク・ラツプ族について」(O Pechingiskikh Lopurej)の二論文を掲げ、この二著が最近に於ける、同族の歴史、民族等の研究書として、最も權威あり、且最も新らしきものであると述べて、本文を終り、その次に同族に關する文獻(各國のもの約二百十一種)を刊行された年代順に排列して居る。本文によつて同族研究及び今まであまり顧みられなかつたロシヤ語の文獻を、各國のそれと並行して參照しうることは、同方面の研究に携るものにとりて益すること多からんことを思つてこゝに粗雑ながら紹介した譯である。(小島武男)